視点

日本的経営の精神

横浜国立大学名誉教授
浅　野　幸　弘

「1850年の時点で住む場所をどちらか選ばなくてはならないなら、私が裕福であるならイギリスに、労働者階級であれば日本に住みたいと思う」

自分のことは案外分からないもの。他人に言われて初めて気が付くことが多い。上の記述はスーザン・ハンレー（ワシントン大学名誉教授）の『江戸時代の遺産』からの引用。江戸時代は封建制下、庶民は抑圧されて厳しい生活を強いられていたというイメージがあり、産業革命を成し遂げた自由の国イギリスとは比ぶべくもないと思いきや、「この二つの社会は、生活の質については比較的よく似て」いたどころか、「間違いなく日本は、イギリスよりも相対的な生活水準ではむしろ高かった」という。これには、「19世紀の西洋の水準からすれば、日本の生活は、裕福なものでさえいくらか禁欲的」だったことが大きかったようだ。

ハンレーは史料を経済学的に分析して上のような結論に達したが、江戸時代に日本を訪れた外国人にも同じような感想を述べるものが多い。

シュリーマン（『日本中国旅行記』）は、「産業技術において、彼らは蒸気機関の助けもなく達せられるかぎりの非常に高度な完成度を示してきている」としており、ペリー（『日本遠征記』）は、「実際的および機械的技術において、日本人は非常な巧緻を示す。……日本人がひとたび文明世界の過去・現在の技能を有したならば、機械工業の成功を目指す